学生による自主コミュニケーション活動

Student's Voluntary Communication Activity

吉田 博^{※1}
Hiroshi YOSHIDA

英 崇 夫^{※2}
Takao HANABUSA

1. はじめに

徳島大学工学部創成学習開発センターは2003年度の特徴GP「『進取の気風』を育む創造性教育の推進」が採択されたことを受けて、学生の創造性教育手法の開発を目的に活動を開始した。その主な活動として、学生の自主創造活動を支援し、その中から生まれる問題点から自主創造に関する問題点を発掘し、学生と教員の合同作業で学習手法を開発している。当センターの根本におく理念は、「自主」、「共創」、「創造」である。「自主」は一人ひとりが確かな意見や考え方を持ち、自ら行動してその成果を他者に表現できる能力を持つこと、「共創」は異なる分野の人々が集まり、互いに影響しあい、それぞれの意見を遙かに超えるような大きいものをつくり上げること、そして、「創造」は自主、共創の思想に基づいて新しいものや考え方を生み出すことと捉えている。学生プロジェクト活動を通してこれらの理念を学び、社会の中で独立できる人材を育てることが私たちの仕事である。創成学習開発センターでは各年度に10数チームが活動しており、2007年度から各プロジェクトチームのリーダーが集まって、センターそのものの運営を自主的に行うようになった。

また、全学的な取り組みとして2010年度から学生による学生支援チーム「繋ぎcreate」の活動が始まった。繋ぎcreateは、大学生にとって新しく何かを始めるきっかけづくりを支援するために、出会い交流の場を提供することをミッションに掲げて活動を行っている。主な活動は、授業や課外活動等のキャンパスライフにおける内容をテーマとして、教職員と学生がグループでのコミュニケーション活動を行うイベントを企画、開催することである。これらのイベントでは、教職員、学生の双方にとって、普段話すことのない、お互いの本音を聞くことができ、学生の意識向上、大学の教育における問題点の発見につながっていることが報告されている^{1), 2)}。

大学は教員とさまざまな技術専門職員が学生の教育および学習支援を行う場である。特に教員は教育・学習

の内容に責任を持ち、学習に効率のよい教育をする立場に立っている。学生を対象とする限り、教員のみの立場で物事を考えることは許されず、絶えず学生と共に教育を考えなければならないというのが筆者らの考えである。したがって、日常から学生と教員のコミュニケーションの場を設けて、学生・教員間の自由な議論がなされるべきであり、またそういう場を学生に与えるということが大学としての使命であると考えている。

2. 創成学習開発センターの活動

2.1 「共創」のひろば

創成学習開発センターの学生プロジェクト活動は開設当初の2004年度から始まった。1チーム数名から10数名のメンバーで構成される各プロジェクトは、基本的にチームごとに活動している。

創成学習開発センターの理念の一つに「共創」の概念がある。一つのプロジェクトチームの中に異なる学部・学科の学生、また異なる学年の学生が混在していれば互いにそれぞれの専門的な立場から意見が述べられ、自分とは違った考え方を学ぶことができる。理想的にはそのようなチーム構成が望ましいが、全てのチームがそうであるとは限らない。プロジェクトが生まれるとき、基本的には同学科、同学年のメンバーが意気投合してあるテーマに基づきチームを構成する。そのような場合、いくらチーム活動をしていても「共創」の概念を容易につかみ取ることができないだろう。しかし、プロジェクトが数年にわたって継続されると、新しいメンバーが加わる時点で、学年を超え、また学科の枠を超えたチームが形成される。異なる分野の仲間が加わることによって異なる考え方を共有することが可能になり、チームの中で「共創」の精神が生まれてくることを彼らは実感する。

創成学習センターには、学生プロジェクトの活動空間として「イノベーションプラザ」を設けている。チームメンバーはここで自由に討論し、計画し、また活動そのものも行っている。同時にいくつかのチームがプラザに同席するので、個人的に他チームとの相談ができる場が生み出される。しかし、創成学習開発センターそのものの当初の目的としては、チーム内での「共創」と共に、チーム間での「共創」を強く意識してい

2011年12月15日受付

※1 徳島大学大学開放実践センター

※2 徳島大学工学部創成学習開発センター

る。

2.2 プロジェクトチームリーダー会

創成学習開発センターでは、異なるチーム間で連帯感を強めて「共創」できる場をつくることを考え、2007年度にリーダー会を開設した。個々のチームが抱える問題をチーム間の協力で解決できるのではないかとこの発想があった。教員が提案して始まったリーダー会であったが、2年目からは学生自身が自主的にリーダー会の役員を決め、毎月定例の会合を持つようになった(図1)。

現在リーダー会で扱う議題は、表1に示すように、新入生オリエンテーションでのセンターの紹介、新入生へのプロジェクト紹介(図2)、プロジェクト審査会、新入メンバー歓迎会、プロジェクト活動の紹介をする「月刊イノベーション」の編集、和歌山大学との合同プロジェクト報告会、最終報告会など極めて多岐にわたっている。2011年度は10月に第2回工学教育に関するアジア会議が徳島大学で開催された関係で、8チームが講演発表した。発表者のみならずプロジェ

クトメンバー30名がこの会議に参加し、他大学の学生たちとの交流をもった。

これらのリーダー会の活動は全て学生自らの手によって運営されている。このような方式ができあがって、センター全体としてのコミュニケーションは極めて良くなったと感じられる。上級生から下級生への伝達、プロジェクト内およびプロジェクト間での話し合いなど、幅広いコミュニケーション活動が創成学習開発センターの活性化を促進していると言ってよいだろう。

プロジェクトマネジメント研修会では、プロジェクトの計画の立て方、活動の進め方やチームの中での議論の仕方など、著者の一人がおおむね指導して方向付けをしているが、グループ討論の演習では上級生がチームをリードして下級生たちに議論の進め方やまとめ方を指導している。また、毎月定例で行われるプロジェクト活動の報告会では、学生同士のピアレビューがなされ、プロジェクト間での意見交換が活発に行われている。

図1 プロジェクトリーダー会

図2 新入生へのプロジェクト説明会

表1 創成学習開発センターリーダー会が扱うテーマ(2011年度の年間行事)

行事月日	項 目	内 容
4月	新入生へのプロジェクト紹介	・新入生オリエンテーションでの説明 ・プロジェクトチームごとの個別説明
5月	プロジェクト審査会	・当該年度のプロジェクト計画の審査
6月18, 19日	プロジェクトマネジメント研修会	・上級生がチーム活動をリード
10月7, 8, 9日	2 nd Asian Conference on Engineering Education (ACEE) への参加	・プロジェクト8チームが講演発表 ・メンバー30名が参加
11月12日	プロジェクト中間報告会	・報告会の企画 ・プログラムの作成
12月	和歌山大学との合同報告会	・報告会の企画 ・和歌山大との連絡 ・プログラムの作成
毎月	プロジェクト月間報告	・プロジェクト活動の月間報告とピアレビュー
毎月	月刊イノベーション編集	・月刊イノベーションの編集と発行
2月(予定)	プロジェクト最終報告会	・報告会の企画 ・プログラムの作成 ・評価法の検討

3. 学生支援チーム「繋ぎcreate」の活動

3.1 繋ぎcreateの目的

近年、学生支援の重要性が高まってきており、我が国の大学では、さまざまな取り組みが行われている。その中でも特に、一般学生を対象とした学生による学生支援活動の取り組みが注目されている³⁾。徳島大学においても、2010年度に開催された「四国キャンパス元気プロジェクト2010」および「学生FDサミット・2010夏」に参加した学生を中心に、学生による学生支援チームが誕生した。そのうちの1つが「繋ぎcreate」である。繋ぎcreateは、上述のように、大学生にとって新しく何かを始めるきっかけづくりを支援するために、出会い交流の場を提供することをミッションに掲げており、教職員から学生への支援ではなく、学生による学生支援を目指している。このミッションのもとに行っている活動は、学生、教職員混成のグループによるトークやワーク・ディスカッション等のコミュニケーション活動を通して、大学生がキャンパスライフの中で、新しく何かを始めるきっかけづくりの場を提供することである。チーム構成は、これらのミッションに賛同する学生10名(2011年12月1日現在)であり、全学FDを担当している著者の一人がサポートをしている。

繋ぎcreateは、これまでに「真剣徳大しゃべり場」、「先生と！真剣徳大かたり場」、「DEEP PEOPLE」、「キャンパス・ビジョン」を企画開催してきた。これらの企画を開催するために、毎週2時間程度、企画ミーティングを開催している。ここでは、企画の立案やメンバー間の情報交換など、チーム運営に関する内容を議論・検討しており、司会進行や議事録作成などは学生が行う。これまでに開催してきた各企画では、学生同士、学生と教職員の間でのコミュニケーション活動が行われ、新しい発見や新しい人間関係の構築に繋がっていることが伺える。以下では、2010年11月から2011年11月の1年間で開催した企画の詳細について、概要と成果を紹介する。

3.2 真剣徳大しゃべり場

真剣徳大しゃべり場は、学生・教職員が大学の可能性について自由に意見を交わし、参加者が自身のキャンパスライフや徳島大学での学びについて再認識することを目的としたグループトークの場である。参加者は8人前後のグループに分かれ、各グループにはコーディネーター(進行役)の学生を1人ずつ配置し、テーマに沿って話を進める(図3)。これまでに4回開催し、表2は開催日、取り扱ったテーマ、参加者数を表している。企画学生は毎回参加者アンケートの分析、反省会を行い、企画の成果と改善点を検討し、次の企画に活かしてきた。その過程でテーマ数の絞り込みや、広報活動を工夫するなどして、回を重ねるごとに参加者数も増加した。第4回では、他大学から4名の学生

図3 真剣徳大しゃべり場

表2 「真剣徳大しゃべり場」の開催日

回・開催日	テーマ	参加者数
第1回 11月11日	①楽しかった授業、楽しみな授業 ②授業の選び方、選ぶ基準 ③今、授業以外で打ち込んでいること、やってみたいと思うこと ④(徳島大学で)あなたは何かをしたいですか？	学生22名 教員6名
第2回 2月10日	①小さいころの夢は何ですか？ ②将来の夢は何ですか？	学生23名 教員10名
第3回 4月21日	①なんで徳大に入学したん？ ②徳大生活、実際どうなん？	学生37名 教員9名
第4回 7月14日	この夏何がしたいですか？	学生44名 教員10名

が参加し、これまで以上に活発な議論が行われた。参加者アンケートからは「他大学、他学年、他学科、先生といった様々な方の意見を聞くことができて、確実に今の自分にプラスになったと思います」、「とても勉強になった。人生経験が少し豊富になった気がする」等の意見が見られ、交流を通じた新しい価値観の発見に繋がっている。

3.3 先生と！真剣徳大かたり場

先生と！真剣徳大かたり場は、学生と教員を繋ぐ架け橋となる場として開催した。毎回1名の教員をゲストとして招待し、ゲストの教育方針や研究内容、学生時代のエピソードなどを話してもらい、参加学生からも自由に質問をすることができる。進行役の学生が、教員の本音を引き出しながら、学生に話を振るなどして、1時間程度フリートークを行う企画である。表3のように徳島大学の教育担当理事や留学生の支援を行っている国際センターの教員など、学生にとって普段あまり話すことのない教員を招くことで、参加学生にとって、新しい発見が期待できると考えた。毎回10名程度の学生が参加し、参加者アンケートからは「人生の生き方やスケールが大きくなる方法など大変興味深い話が聞けた」、「大学生である今しかできないことに積極的に挑戦していこうと思った」等の意見が聞かれ、

表3 「先生と！真剣徳大かたり場」の開催日

開催日	教員（ゲスト）	所 属
6月6日	和田 眞 先生	徳島大学教育担当理事
6月13日	日置善郎 先生	大学開放実践センター
6月20日	山口裕之 先生	総合科学部
7月4日	大石寧子 先生	国際センター

図4 先生と！真剣徳大かたり場

学生の積極性や意欲の向上に繋がっていることがわかる。また、「普段あまり関わらない先生の新たな一面を見ることができた」、「先生の印象が変わった。すごく親しみやすくなった」、「国際センターを身近に感じられた」といった意見も見られ、本企画の目的である、学生と教員を繋ぐ架け橋として、関係構築に寄与できたと言える。

3.4 DEEP PEOPLE

DEEP PEOPLEの目的は、「グループワークを通して、在学中に大学生がなすべきことを形にする」ことである。参加者は5人前後で1つのグループを構成し、各グループにはコーディネーター（進行役）の学生を1人ずつ配置した。参加者は今回のテーマである「徳大在学中に大切にすべきことは何か!?」について、グループ内でイメージマップを作成しながら議論を進めていく。最後に各グループの議論の内容を発表し、質疑応答を行うことで、全体での共有を図った。また、企画の終了後には飲み物とお菓子を用意し、参加者同士の親睦を深めるフリートーキングの時間を設けた。

この会は、2011年6月27日に実施し、学生17名、教員5名の計22名（企画・見学者を含む）が参加した。参加者は言葉だけの議論とは違い、イメージマップを作成する過程で自らの発想と他人の発想を視覚的に繋げることができ、新たな意見の創出に役立っていた。参加者の中には、「DEEP PEOPLE」の名のとおり初めから積極的な学生も多く、コーディネーターを中心に各グループともに白熱した議論が行われた。イメージマップの作成に関して、初めは慣れていない様子の学生もいたが、議論が進むにつれて、楽しみながら書き込んでいる様子が見受けられた。議論の内容は、「徳大在学中に大切にすべきこと」を見つけることであ

図5 DEEP PEOPLE

図6 DEEP PEOPLEに参加して今後あなたが大学生活でなすべきことを見つけられましたか？

たが、その過程で「何をなすべきか」、「その理由は何か」、「得られるものは何か」など発展的な議論も行われた。中には、自分の実体験を話す学生がいたり、大学生活でどんなことに興味を持っているか、または何に熱中しているかを話す学生がいて、各グループともに大いに盛り上がっていた。発表・質疑応答のときには、参加者からの積極的な質問が多くなされ、ここでも白熱した議論が交わされた。また、フリートークでは、参加学生が教員に日頃の大学生活に関する質問、相談を行うなど、全体を通して大変密度の濃い時間であった（図5）。

DEEP PEOPLEでは参加者アンケートを実施し、参加者のうち企画・見学者を除く15名から回答を得た。アンケートでは「DEEP PEOPLEに参加して今後あなたが大学生活でなすべきことを見つけられましたか？」（5択法）という設問に対して、6割以上の参加者が、見つかった、またはどちらかといえば見つかったと回答している（図6）。このことから、DEEP PEOPLEは概ね参加者が大学在学中になすべきことを見つけることに寄与できたといえるのではないだろうか。また、自由記述では、良かった点として「自分の抱えている問題の解決に少しなった」、「一度きりの人生をいかに生かすかを考えるきっかけになりそう」といった意見

が挙げられていた。このことから、大学生としての目的の発見に繋がっていると考えられる。さらに「質疑応答で少し厳しい意見をもらって刺激になった。器が大きくなった気がした。」という意見もあり、発表・質疑応答が自分自身の意識の向上に強い影響を与えていることがわかる。一方で、今後改善すべき点として、参加者が少ないことや、グループワークの方法・時間の見直しなどが挙げられていた。DEEP PEOPLEは、大学生に自身のキャンパスライフを充実させるための「きっかけづくり」として一石を投じていることになっていると推察できる。しかし、上述の改善点を次回以降に修正し、さらに良い議論ができる場として実施していく必要がある。

3.5 キャンパス・ビジョン

キャンパス・ビジョン（以下、C・V）の目的は以下の3つである。①「新しく何かを始めるきっかけを掴む」、②「ディスカッションを通じてコミュニケーションの面白さを知る」、③「自身のキャンパスライフを再発見する」。これらの目的を達成するために、C・Vの特徴として、次の4点が挙げられる。①徳島大学の学生・教職員だけでなく学外の学生・教職員、社会人にも参加を呼びかけることとし、プロジェクトチームを結成し、早い段階から徳島県内の四国大学ほか県内外の学生を巻き込む形で企画を進めた。②C・Vで扱ったテーマは「『学習すること』とは?」、「『活動すること』とは?」、「『就活すること』とは?」であり、すべてキャンパスライフの中でコアとなる内容である。③参加者は初めに3、4名ずつ、28グループに分かれて議論を開始した。C・Vの議論は、「ワーク」と呼ばれるテーマに沿った意見を創出する作業と、「ディスカッション」と呼ばれる創出した意見を他のグループと議論し厳選する作業に分けられる。その後、厳選された意見をテーマ別に発表した。④C・Vのディスカッション終了後には、お菓子を用意し参加者同士の親睦を深めるフリートークの時間を設けた。

C・Vは、2011年11月3日に開催し、11大学から学生86名、教職員14名、また一般参加者8名の計108名が参加した（見学・企画者を含む）。はじめはプロジェクトチームの学生が話を振るなどして、参加者に意見を求めていたが、次第に参加者からの積極的な発言が見られるようになった。「ワーク」ではテーマごとに分かれて、教員が大学の勉強とはどういうものであるかを語ったり、社会人が自身の仕事に関する経験談を語ったりするなど、各グループともに学生、教職員、社会人がそれぞれの立場でテーマを捉え、活発な話し合いが行われた。その後の「ディスカッション」では、それぞれのグループの意見がぶつかり合った。各グループとも同じテーマということもあり、意見が重なることも多かったが、似ている意見の中で差異を強調したり、全く新しい視点から切り込んでいく学生もいた。

図7 キャンパス・ビジョンの全体風景

図8 キャンパス・ビジョンでのグループ討議

図9 「キャンパス・ビジョン」は、あなたのキャンパスライフを見つめなおすきっかけになりましたか？

ここでは、白熱した議論となり、意見の厳選が行われた。発表の際は、各グループが厳選した意見を同じテーマの参加者全体で共有し、質疑応答を通して、大変濃い内容の時間となった。また、フリートークの時間には70名余りの参加者が残り、ディスカッションにおける議論の続きや、大学、社会人といった立場を越えた交流を実現することができ、参加者にとっては大変有意義な時間になったことが伺える（図7、図8）。

C・Vでは参加者アンケートを実施し、部分参加者・見学者を除く92名から回答を得た。「『キャンパス・ビジョン』は、あなたのキャンパスライフを見つめなおすきっかけになりましたか？」（5択法）という設問に

対して、参加者の5割が「そう思う」と回答し、「どちらかといえばそう思う」を合わせると8割に達している(図9)。このことから、C・Vの目的であった「キャンパスライフの再発見」が概ね達成されたと言える。また、自由記述において、良かった点として、「他大学の人と交流できた」、「いろいろな意見が聞けてよかった」等の意見が多く、ワークやディスカッションを通して、学生同士もしくは、教職員、社会人との交流やコミュニケーションを行えたことがわかる。今回、他大学から参加した学生の中には、自大学において、繋ぎcreateと同様の活動を行っている学生も多く、お互いの情報交換をする機会ともなった。一方で、改善点として、グループワークやディスカッションの進め方や時間配分、テーマの範囲や論点、テーマ数などが挙げられた。また、徳島大学からの参加者が約50名と最も多かったが、総合科学部の学生に偏っていたこと、徳島県内の大学にも呼びかけたが四国大学からの参加だけに留まっていたことも今後の改善点である。C・Vは、大学、立場、世代の異なるさまざまな人との交流を実現した点、多数の参加者にとってキャンパスライフを考え直すきっかけとなった点において意義あるものであった。C・Vでの議論がこの場限りのものにならず、日々のキャンパスライフにおける行動変容にまで繋がれば、さらに意義ある企画となる。今回挙げられたテーマ設定に関する改善点などは特に検討し、次回の企画・開催に繋げたい。

4. 日工教のしゃべり場

教育の議論は教員だけでなく、学生もそこに加わるべきであるという認識のもとに、著者の一人は2010年度の日本工学教育協会の全国大会の場に学生セッションを設けた。学生の講演発表と共に、学生だけのワークショップを設け、「大学生活をよりよくするために」というテーマで学生のみで討論してもらった。全国から集まった大学および高専の学生たちが自由に教育を語り合う場を構築した。2011年度は「真剣徳大しゃべり場」にならって教員も参加する形をとった。学生と教員、しかも他大学・高専の教員との間の隔てのない

会話の場が構築された。

5. おわりに

徳島大学では「進取の気風」を教育理念の重要な柱に掲げている。「自ら進んでことをなす」という意味である。社会的な生産現場では仕事はチームによって進められる。そこには、異なる分野の専門家たちが集まり、大きな目標に向かって共同で新しいものの開発に当たらなければならない。このような場において大切なことは、一人ひとりが専門的な知識を持つとともに、互いの意見をそのチームに取り入れる力をもたなければならない。コミュニケーション力があれば、自分の意見を述べ、他人の意見を吸収し、そしてチーム全体で大きな構想を作り上げることが可能になる。

参 考 文 献

- 1) 浦邊研太郎, 光宗 榮, 福島沙奈, 吉田 博: 学生による徳大生の正課外活動支援－真剣徳大しゃべり場の企画・開催を通して－, 平成22年度大学教育カンファレンスin徳島, pp.34-35, 2010
- 2) 吉田 博, 野中 亮, 池内 将: 学生による正課外活動, 第59回中国・四国地区大学教育研究会プログラム集, pp.8-9, 2011
- 3) 西本佳代: 学生支援活動の全国的特徴－学生支援GP採択プログラムに着目して－, 高等教育研究叢書112, pp.33-42, 2011

著 者 紹 介

吉田 博
学 歴: 愛媛大学大学院理工学研究科数
理科学専攻博士前期課程修了
職 歴: 2009年徳島大学大学開放実践
センター特任助教, 2011年徳島
大学大学開放実践センター助教
専門分野: 高等教育
所属学会: 大学教育学会, 日本教育工学
会, 日本生涯教育学会
連絡先: h-yosida@cue.tokushima-u.ac.jp